

太田地域の

道とひと

— 道路誌と人物誌ものがたり —

茂木 晃



本島家の人々 憂国の士 本島柳翁 — 刀圭界の大先達 —



本島柳翁

ここ太田に代々医業を継いで仁術を施す本島病院がある。高祖は本島数馬といい、今を去る三百六十余年、江戸時代初期太田に定着し、以来十三代、現院長悌司氏まで連綿たる歴史に輝いている。本島家第九代、自柳襲名第六代当主は本島柳翁と号し、江戸時代末期より大正十三年まで八十四年の長い生涯を全うし、憂国の志士、医師、政治家として目ざましい足跡を残した。

柳翁は天保十一年（一八四〇）十一月十三日太田町に生まれ、幼名英之助、号貞庵と称し幼少より好学の志が厚く、優れた頭脳と胆力、血気にはやる俠気も持っていた。少年時代は江戸に出て幕府教官長谷部謙庵、梁川星巖等に漢学、国学を学び、安政三年十七歳の時医術を長崎、熊本に学んだ。殊に熊本藩医村井洞雲に長く師事し医術の修業に励んだ。慶応元年、父の先代自柳が死去したのを機に帰郷し、家業を継ぐことになった。柳翁という名は明治三十二年隠居後、改名したものである。

慶応三年、維新回転の激流の中、柳翁は大館謙三郎、金井之恭、太田稻主、黒田桃民、



本島総合病院玄関（西本町）

岡田稲雄らとともに尊皇の大義を唱え、新田満次郎を盟主として義旗を挙げようと企ったが、幕吏に捕えられ、岩鼻の獄に数カ月間幽閉されてしまった。折も折、岩倉具定を先峰とする官軍東山道東下に際会したため、獄から解放された。明治元年、柳翁らは新田満次郎らと新田官軍を組織して活躍したが、会津兵の降伏によつて解隊、帰郷した。明治二年、岩鼻県を経て次のような賞状と「新論」という書物一部二冊を下賜された。

「上州新田郡太田町 医師自柳 其方儀 従来憂国之志厚 神妙之至 依之

此品遺候事 己四月」

町村制、郡制、府県制など近代的行政組織の確立と実施にともない、柳翁は医業の傍ら、町会議員、郡会議員、県会議員に推挙され、大いに政治的手腕を発揮し、地方自治に貢献すること絶大であつた。至誠一貫、熱血の生涯は、地域住民の福祉や後輩医師の育成、水利用水組合の指導、銀行・会社の重役など幅広い活動が知られている。

大正十三年（一九二四）十二月十二日、衆人の惜別を受けて永眠した。行年八十五歳。法名 英礼院貞山柳翁居士。

本島家の人々

本島自柳

—医学界の重鎮・県会議長—



本島自柳 県会議長

本島家第十代、自柳襲名第七代本島自柳は本名を綾三郎といい、慶応三年（一八六七）六月二十日、埼玉県北埼玉郡今井村（熊谷市）の栗原友右衛門の子として生まれ、撫一庵と号した。

明治十八年（一八八五）四月、埼玉県師範学校を卒業して教職の道を進もうとしたが、先代柳翁に見込まれ、長女乙女と結ばれて本島家の養嗣子となった。明治十九年に上京し、語学と医学を研さんすること三カ年、同二十一年十一月、内務省施行の「医術開業後期試験」に見事合格して医籍登録された。この後しばらく北里研究所での研究を積み、同二十二年九月、東京帝大医科大学専科に入学し、佐藤三吉博士に師事して丸三年、薬物や外科学を専攻して二十五年六月にそこを卒業し、翌二十六年三月、七カ年にわたる学理研究と技術錬磨の実力をもって現在地に開業した。

医業専念の傍ら、明治三十四年四月、三十五歳の若さで太田町会議員に初当選し、次い

で三十六年十月には新田郡会議員にも当選、以後三期十二年間、新田・太田地方の行政・立法に尽力し、その間新田郡会議長に選任されて重責を果たした。

大正四年（一九一五）九月には群馬県会議員に出馬して当選し、以来三期十二年、県政の重鎮として活躍した。その間、県参事会員、県会議長の要職に就き、政友会派の長として活躍した。

また、明治三十六年四月、新田郡医師会長、大正七年、群馬県医師会選出日本医師会代議員、群馬県医師会副会長、県学校医会副会長など医学界の公職もこなした。

さらに、大正七年から、新田銀行取締役、上毛実業銀行、群馬県農工銀行、群馬大同銀行の各取締役に使われて、現群馬銀行の基礎を築くなど、昭和十四、五年頃まで、金融、経済面でも大いにその能力を発揮した。

自柳は昭和十四年、司法保護常務委員の職を兼任したが、昭和十七年春、胃癌を発病し、同年十月中旬手術、翌十八年十二月二十七日、永眠した。行年七十七歳。法名 真玄院仁山鶴寿大居士。

本島家の人々

本島柳之助

—放射線医学の権威—



本島柳之助

本島家第十一代は本島柳之助である。自柳襲名をきらい、生涯柳之助で通した放射線医学の権威で、英国紳士に通ずる端正な風貌の中に、カミソリのように切れる頭をもち、「太田の殿様」とあだ名された。

柳之助は明治二十五年（一八九二）十二月十一日、先代自柳と乙女の長男として生まれた。

太田中学卒業の年に実母を失い、大きなショックの中で悶々の日々を送るが、卒業後、文学好きのためもあり、早稲田大学文学部の聴講生となり、永井荷風の講義をきいたという。大正六年夏、信州、木曾、甲州の徒歩旅行に出かけ、その紀行文を上毛新聞に載せ、同年暮れには宇都宮歩兵第六六連隊に一年志願兵として入隊するなど青春の彷徨時代を過ごしている。

たけ夫人との縁談や父、親戚の薦めで、大正八年（一九一九）四月、東京医専に入学して、医学者としての第一歩を踏み出した。同十一年同校卒業後、順天堂病院外科入局、翌

年医師免許を得て慶応病院放射線科助手となり、藤浪先生の薫陶を受けてレントゲン医学の研さんに邁進し、幾多の実践に明け暮れた。

大正十五年二月、神戸を出帆して渡欧、昭和三年十二月まで先進医学を学んだ。スイスのベルン大学でドクトル免状を取り、この後ドイツのベルリン大学で癌研に励んだ。

帰朝後すぐに慶応病院放射線科講師に任命、同六年に同科教授に昇進していく。この間、多くの論文を発表したが、昭和五年八月十二日、慶応大学に出した学位論文が通過して、医学博士の称号を獲得した。

以後約二十年間、肺結核、胃癌、気管支炎、脚気、骨肉腫など放射線利用の医学研究論文を発表し、晩年は医学研究のかたわら東京医大教授、日本医学放射線学会会長などの要職にあつて後進の指導に当たった。

昭和三十二年九月十四日、急性肝硬変で惜しまれつつ逝去し、太田東光寺に埋葬された。六十四歳。法名 本覚院人徳慈円翠柳大居士

酒豪でも知られる柳之助は僚友の足立忠氏から次のような評を得ている。

たのしみは うしろに柱 前に酒 気の合うた客 高原の風